

地方の若者は地域間格差をどう生きるか

——地方都市の若者の地域移動の意識と実態——

川浪 大吾
(塩原研究会 4年)

- I はじめに
- II 先行研究——地域間格差をめぐる議論——
 - 1 東京一極集中
 - 2 地域内格差
 - 3 マイルドヤンキー論
 - 4 地方中枢拠点都市圏
 - 5 地方暮らしの若者の描き方
- III 分析の枠組み——地方都市における若者の地域間移動に関する意識——
 - 1 地方の特性が若者へ与える地域間移動への意識
 - 2 若者の自己充足感
 - 3 教育の地域間格差が与える若者への影響
- IV インタビュー調査
 - 1 調査方法
 - 2 インタビュー対象者の概要
- V インタビュー結果の分析
 - 1 地方に残留した人々
 - 2 地元から出て上京した人々
 - 3 まとめ
- VI 考 察——地域間格差をどう生きるか——
 - 1 何が「格差」と認識されているのか
 - 2 地域間格差は問題か
 - 3 地域間格差を乗り越えるために
- VII おわりに

I はじめに

近年における地域間格差の議論として注目されるのが東京への一極集中である。総務省統計局による2018年度の住民基本台帳移動報告書では、三大都市圏における転入超過の傾向が見られ、そのなかでも東京圏における20～24歳の若者の転入超過数が著しく高いことがわかっている¹⁾。このように若者が東京へ移動する傾向が顕著に見られており、地方における人口流出や高齢化、経済的圧迫が地方と都市との間に地域間格差を発生させている。

従来の議論における「三大都市圏とそれ以外の地方」の対比構造は、地方を一括して否定的な地域として捉えてきた。それゆえに地方の中に存在する都市や郊外「地域内格差」の実態はあまり注目されてこなかった。また、若者の特性に焦点を当てた時に、首都圏の若者エリートと、地方のヤンキーといった地域的特性に代弁された一般的な若者像が語られることが多い。そこで地方から首都圏へ進学する若者や、首都圏へ上京することもできたが、地方にとどまることを選択した若者の地域間格差意識に着目することが従来の地域間格差の議論を見直すきっかけとなる可能性を持つ。本研究は地方のなかでも大都市的な機能を持つ地方都市に着目し、そこに住む若者がいかに地域間格差を認識しているかを調査する。今までの地方暮らしの若者研究で議論されてきた「マイルドヤンキー」のような対象ではなく、上京する選択肢を有していた若者や、上京経験をした若者の意識に注目することで地方暮らしの若者に地域間格差がどのように捉えられ、彼らの人生にいかなる影響を与えているかを考察する。

本研究では、地方と都市の二元論的な地域間格差ではなく、地方都市という新たな地域枠組みを設ける。これにより、田舎や大都市にも属さないその中間の立ち位置である地方都市の地域的な特性にも注目する。それに伴い、本研究では地方都市である福岡市の若者の集団を二つのグループに分け、インタビューを行う。大学進学時に地元である福岡市に残った若者グループと、上京した若者グループに対して、その進路選択の理由や生活する地域に対する満足度、地域間の格差意識を問う。

Ⅱ 先行研究——地域間格差をめぐる議論——

1 東京一極集中

日本において、大学や企業が東京に集中していることで、人の流れが東京に集中する現象が現れている。このような東京圏への人口流出は、主に所得水準の高さや就職機会の多さであり、地方から都市部への移動を促す主な要因となっている。東京はあらゆる文化や情報の発信源であるとともに、経済効率性という面から、東京へ移動するメリットは大きいと考えられる。現に東京都を中心に首都圏への転入超過の傾向は他県と比べて著しく高いことがわかっており、地域間格差の存在を端的に示す値として参考にされている²⁾。また、社会階層と地理的関係性に注目した速水健朗によると、都市社会学者のリチャード・フロリダは社会的な階層の移動と地理的流動性は密接に関わると述べている³⁾。つまり地域間の移動は親の学歴や職業、所得などの出身階層や、生まれ育つ環境的要因といった個人の社会的属性によって規定される。つまり、地域間の移動を経験する者は、「移動」が選択肢として与えられているという点において階層的に限定的な対象であることがわかる。そのような移動可能性を持つ若者が、より多くの機会を求め東京へ移動することは、地方の優秀な人材が都市部へ流出し、その他は地元に残るという対立構造を生んでいる。しかし、同質の階層集団のなかでも移動する若者とそうでない者の地域間格差に対する意識を比較検討することで、より鮮明な都市と地方の格差の実態と関係性を観察できるのではないか。

地域社会学の分野で地域の多様性に注目した研究によると、グローバル化がもたらす政治・経済・文化的領域における均質化が地方の固有性を浮き彫りにすることでグローバルに消費可能な地域イメージを獲得するが、グローバル化が形成した地域社会の固有性は、ローカリティをめぐる時空間と人々との間に断絶を生むことを危惧している⁴⁾。このように大都市圏と地方との格差の要因の一つとして大都市のグローバルな価値観に地方が包摂され、グローバル化が地方の個性を埋没させており、グローバルな価値基準からこぼれ落ちる地方とそうでない都市の格差があらわになっている。この現状を考えると、東京一極集中はグローバル化による各情報・文化産業・大企業本社や銘柄大学が首都圏に集中し、よりエリート志向の強い人材の首都圏への流出は今後ますますエスカレートすると考えられる。しかし、このようなグローバルな感覚や価値観に共鳴しないことを選択

する人々の存在を否定的に捉えることも適切な議論ではない。

ここでは東京一極集中の基本的な概要を考察した。大都市圏への人口流出はグローバル化の流れを汲みしており、地方と首都圏とでは、よりソフト面ハード面の両方で分断が進んでいる。これを踏まえて、東京一極集中は若者の地域間移動や人生プランに対する意識に強く影響を与える現象であるといえる。しかし、この議論では、地方暮らしの若者のネガティブなイメージが強調されがちである。地方暮らしの若者といっても様々な社会的属性を考慮しなければならず、従来の議論では地方暮らしの若者の潜在的な能力や地方の多様性といったものが見落とされている。

2 地域内格差

東京一極集中をめぐる議論では地方と首都圏での地域間格差の問題が注目される。しかし、従来の地域間格差の議論では、地方の多様性について言及されていないものが多い。特に地方のなかにも政令指定都市といった都市的機能を持つ地域がある。このように地域間格差を議論する上で必要不可欠なのが地域内における格差である。

地域間格差を空間的な格差と捉えると、「地域の所得水準」、「仕事の機会」、「通勤・通学の便」、「買い物の便」、「ビジネス・商売の便利」といったアクセシビリティの程度の格差が重点的に議論されている⁵⁾。このように地域間格差は地方と都市における物理的な格差を示しているように感じられるが、それは同時に地方の内部における格差にも当てはまる。また、地域内格差に関しては「裕福な層—貧困な層」というヒストグラム上のばらつきとして捉えることもでき、格差指標は複数のデータから参照されるのでより複雑な関係性を持つとされている⁶⁾。つまり、地域内格差は物理的な地域格差にとどまらず、地域内における社会的階層や属性によって規定される要因でもある。したがって、地域内においても都市部とそれ以外の郊外といった区分けがあり、アクセシビリティの格差や階層的な属性の格差が人々の地域をまたぐ移動可能性に影響を与えることが考えられる。このような地域内格差を鑑みると、地方における都市部、つまり地方都市という地域区分は首都圏の都市機能に類似するところもあり、地方都市と首都圏では大きな違いがないとの見方もできる。

いわゆる地方と呼ばれる地域内においても多様な階層に属する人々が存在し、地域内部においても格差が存在する。そのなかでも地方都市は地域の特性的にも

首都圏と類似し、地方都市から首都圏への移動を促進している側面がある。一方で、地方都市にとどまる若者も多く存在する。このようなパターンを検討することで、上京した地方都市の若者と地元にとどまる者が、地域間格差や東京一極集中をどのように受け止めているのかの比較・分析を通して格差の所在を明らかにする。

3 マイルドヤンキー論

マイルドヤンキーとは、上京意識がなく、地元で強固な関係基盤を築いた上で地元から移動しようとしなない人々のことであり、狭い日常生活圏で旺盛な消費意欲を持つとともに、上昇志向が低く、地域や古くからの友人関係に絆意識を見出し平凡な生活を大切にするのが彼らの特徴であるとされる⁷⁾。このように地方に住む若者の特性に注目した議論では、地方の若者が都市部の若者と比較して劣った対象と想定されている。

さらに、東京郊外で地元暮らしをする若者の生活実態に焦点を当てた研究では、親世代から地元 roots に根ざす「地元の若者」は都心部での派手な経済的消費活動を通してブランド品のユニフォーム化を実現させ、仲間内での居場所を見つけるとともに、時間的消費活動として深夜に友人と集まることからグループ的な情緒的連帯感を強化させることが示された⁸⁾。また、そのような若者は地元暮らしの満足度に対して、経済的要因よりも存在論的要因である「繋がり」が地元暮らしの満足度に直結していると実感し、収入や仕事などの経済面での不安定性はあるものの、人生の豊かさや生活の質においては豊かであることを結論づけた⁹⁾。

このように近年、上京意識がなく、ほどほどな生活を望む地方暮らしの若者として「マイルドヤンキー」といったカテゴリーが出現した。この議論は地方に住む若者の描き方の参考になるものである。若者の有する価値観として、繋がりやほどほどな生活といった内向き志向は特に大都市圏を離れるにつれて強くなるのかもしれない。一方で、地方都市に暮らす若者をマイルドヤンキーとして一つのカテゴリーに収めるのが適切かは議論の余地がある。

4 地方中枢拠点都市圏

地方暮らしの若者に焦点を当てた轡田竜蔵は、地方の多様性を考慮し、三大都市圏とは別に全国で30万人以上の基準を満たす都市圏を「地方中枢拠点都市圏」と呼び、そこから外れる地方圏の地域を「条件不利地域圏」とした¹⁰⁾。本研究で

も、都市と地方という二元論的な区別ではなく、轡田の議論を参考にしながら日本における地域社会の特徴を三つに分類する。

具体的には、本研究のフィールドである福岡県では福岡市（人口160万人）が地方中枢拠点都市圏に該当する¹¹⁾。また、本研究において、地方中枢拠点都市圏を地方都市とみなし、地域間格差の議論であまり触れられてこなかった地方都市を分析の主軸におく。

5 地方暮らしの若者の描き方

ここでは、地方暮らしの若者の多様性に注目する。地方暮らしを議論する際に、移動できない若者の地方在住や、地方の経済的衰退に伴う貧困への帰結など、地方暮らしに対するネガティブな見方を轡田は「社会的排除モデル」とする。それに対して、地方のリソースの豊かさ等により地方が引きつける力を持つとした、地方のあり方をポジティブに捉える議論を「社会的包摂モデル」とし、そこに「存在的要因」と「経済的要因」を交えて地方暮らしの若者の地元に対する満足度を図る指標を示した¹²⁾。この議論によると、存在論的要因である人との繋がりや生きがい、そして経済的要因である消費活動のフラット化に対する若者の満足度が高ければ、それを満たす地域において「社会的包摂モデル」を当てはめることができる。このような前提のもとで本研究のフィールドである福岡市は、そこを地元とする若者にとって、消費環境的な側面と存在論的な側面の両方から社会的包摂モデルに当てはまることが仮定できる。それによって若者の意識は地元志向が強まることが予想される。

包摂か排除か、という議論では「条件不利地域圏」が排除の性質を持ち、「地方中枢拠点都市圏」は包摂の性質をもつという対比が行われている。他方で、地方中枢拠点都市圏と三大都市圏では地域満足度に有意な差が見られないことがわかっている¹³⁾。このことから、田舎と首都圏の間には、生きやすさや消費環境といった面で明確な格差が存在するが、地方都市と首都圏では地域に対する満足面の有意な差はみられないといえる。つまり、地方都市に暮らす若者は首都圏との格差意識を強く持たないと仮定でき、それは首都圏と変わらない生活・消費環境と、地元での繋がりや人間関係に起因するものであると仮定できる。

地方都市に住む若者は、上記で述べたように大都市と地方都市の明確な区別は意識しておらず、地方都市において何不自由ない生活環境に満足しているという描写が可能であるのではないか。

Ⅲ 分析の枠組み

——地方都市における若者の地域間移動に関する意識——

1 地方の特性が若者へ与える地域間移動への意識

全国の4割の大学生が東京圏に集中している。東京に若者が惹きつけられる理由として、4年生大学の選択肢の豊富さや、就業機会の多さがあると考えられる。つまり、若者における地方から大都市への移動には学歴を高め、成功を目指すといった意識が働いていることがわかる。しかし、若者の「幸せ」に着目した研究では、学歴の高い人と学歴の低い人の間では、中学卒を除いて幸福度にほとんど差がないことがわかっている¹⁴⁾。それゆえ、地方都市においてさらなる学問的達成を求めて大都市圏に移動する動機には、「幸せ」を含むものは少ない。さらに、大都市へ移動して高い学歴を獲得しても、必ずしもそれが成功を約束するものではないので、主観的な幸福には繋がりにくい。このように、地方都市から首都圏への移動は、より多くの機会を求め人生への期待度を向上させる働きはあるが、それが必ずしも豊かな人生を保証するとはいえない。

また地方暮らしに対する肯定的な意見として、地方都市の充実した消費・生活環境が供給する幸福感に注目したものがある。岡山県を中心に若者へのインタビュー調査を行った阿部真大は、地方都市に見られる消費社会の進展（大型ショッピングモールの存在など）によって誕生した都市的空間を「ほどほどパラダイス」と称している¹⁵⁾。このように近年の地方都市においては充実した消費環境が実現されており、地方に暮らす若者の満足度は大都市と大きな差がないことが考えられる。しかし、若者にとって安価に楽しく生活できる都市的環境が整っていても、その生活を支える社会性は弱く、存在論的不安があるという意見もある¹⁶⁾。一方で首都圏も含め、日本全体において都市全体のショッピングモール化が進み、川崎市の武蔵小杉のようなモールシティが住みたい場所として人気を集めている傾向もある¹⁷⁾。

このように、地方都市と大都市における都市的空間は、消費環境という観点からは大きな差は確認しづらくなっている。地方都市においても大都市的な生活環境にあり、ほどほどかそれ以上の生活を営むことができる。さらに、地方都市と大都市でそれほど大きな消費環境的な差がないのであれば、地方都市の若者が首都圏へ移動する意味は「暮らしやすさ」以外の要因にあると仮定できる。十分に

生活できる地方都市から首都圏へ移動する必要があるのであれば、それはいかなるものなのか、上京経験を経た若者へのインタビューを通して考察したい。

2 若者の自己充足感

地域に対する若者の意識に、その地域での生活の幸福感や満足感が与える影響は大きい。ここでは幸福の感覚に直接的に結びつく存在論的要因、つまり自己充足感を得られる諸要因を具体的に分類する。それぞれを検討することで現代の若者が地域移動と「幸せ」をどのように結びつけているかを検討する。

まず、人は生まれながらにして他人との比較をする習性を持ち、他人より優位にあれば幸福を感じ、劣位にあれば不幸を感じるとする「相対仮説」がある¹⁸⁾。確かに、若者の幸せに対する意識の多くは、比較によって形成される。しかし、幸福に貢献する10個の要因を心理的側面から考察した研究では、1（最も幸福に貢献する度合いが低い）～10（最も幸福に貢献する度合いが高い）までのスケールで分類し、7、8、9、10番目の項目にはそれぞれ「多くを求めない」、「友人を作り大切にする」、「結婚する」、「遺産子を最大限に活用する」といった要因があることがわかっている¹⁹⁾。

それゆえ、幸せに作用するものとして、他者との比較によるものと、自己の内部にある主観的な基準に基づく自己充足感という二つの要因がある。このことを地域間格差の文脈に当てはめて考えると、首都圏と地方ではどうしても所得や情報・文化発信において比較にさらされることになる。この比較が与える若者への影響は、そうではない地元に残る若者に比べて大きくなる。つまり、都市と地方の比較がそのまま自己充足感に悪影響を与え、主観的な幸福基準を確立しにくい状態を生むといえる。一方で地方都市、地元に残る若者の充足感は、地域間の比較にさらされることなく主観的な幸福基準を得られやすい環境となっている。

以上、若者の自己充足感に作用する二つの側面を考察した。首都圏へ移動する地方都市出身の若者は、首都圏と地方都市を相対化し、格差の現実を強く意識する傾向にあると予想できる。一方で、地方暮らしの若者は、首都圏と地方を相対化する機会が少ない。それゆえに劣等感を抱く可能性は比較的低く、地方都市での暮らしでより主観的な幸福基準を確立できる機会が多いといえる。

3 教育の地域間格差が与える若者への影響

若者が充足感を得られる一つの基準として教育的達成が挙げられる。そこで、

教育的な地域間格差が若者の充足感に与える影響は以下のように仮説づけられる。まず、東京といった大都市においてはより大卒の割合が多く、大卒のロールモデルとの交流やネットワークの形成、大卒を前提とする規範の内在化の期待が高い。また、住民の大卒割合によって望ましい教育達成の価値観や、教育サービスへの接触が異なることもわかっている²⁰⁾。それゆえ、大卒割合が多い首都圏では若者の意識はより教育的達成に積極的になり、より良い教育環境のもとで若者の充足感は増すといえる。

地域間における教育の格差の要因としては、社会階層が似た人々が同じ地点に集まり、同質性の高い集団、つまり集合的な階層が形成されることで規範性を伴う文化が成立し、人々の選択・行動・意識が変わるとした見解もある²¹⁾。東京では、公立学校の「学区」に狙いを定めた転居が起こっており、文京区の高級住宅街が含まれる小学校に人気殺到している事実もある²²⁾。また、経済学者のティム・ハーフォードは「他人の近くにいること」で得られる効用は「頭が良くなる」ことであると指摘し、人々は都市に住むから賢くなり、生産性の向上が観察されるとした²³⁾。このような議論から考察できることとしては、場所や居住地域を資本として東京に人々が移動することである。そして階層的に同質な集団が形成されるに伴い、教育的達成の高さが首都圏を集中して顕著になる。また、このような問題は首都圏に限らず、地方においても上位階層の集団は特定の地域に集中し、それが地方のなかでの地域内格差として現れることがわかる。

このように教育達成に焦点を当てると、教育に関心のある階層集団の集中する場所として、教育サービスや銘柄大学の集中する首都圏に人々の移動が起こる。また、地方においても多様な階層の存在があることを考慮すると、より都市部が学習達成において理想的な地域として人々に認識されているといえる。それゆえに、より良い教育機会を求める場合、地域間の移動可能性を持つ地方都市の若者は、上京してまでも教育的達成を求めるか、慣れた環境で安心できる地元での生活を続けるかといった要素を天秤にかけなければならない。もちろん地方都市の大学が劣ったものであるということを主張しているのではない。しかし、より教育的に望ましい環境を求めるのであれば、首都圏への進学は地方都市の若者へ強く意識されることであるのがわかる。そこで地方都市の若者はこのような教育機会の格差をどのように意識しているのかをインタビューで掘り下げる。

IV インタビュー調査

1 調査方法

これまでの議論に基づき、地方都市を都市と地方の二元論ではなく、大都市と条件不利地域として表象される地方の中間に位置するものとして位置づける。地方都市は消費環境といった面で首都圏と同等な機能を持ち、人々の満足度に関しては両者に有意な差は見られないと仮説づける。さらに、地方都市での存在論的要因からの満足度は高いと仮定し、地方都市の若者が地域間格差を認識しているのであれば、それはどのような要因なのかを分析する。以下では、地方中枢拠点都市として福岡市をとりあげ、大学進学に伴い地域的にも階層的にも同質的な集団のなかで地方都市にとどまることを選択した若者と、首都圏への移動を選択した若者へのインタビューをもとに比較・分析を行う。

インタビューに際して、大学進学を機に地方か首都圏を選択した理由及び大学生活全般で感じた地域間格差、首都圏に対する意識、さらに地域在住における満足度を1～10のスケールで測る質問を設定する。また、調査対象はスノーボール・サンプリング形式をとり、地元か上京の二つのパターンに当てはまる調査対象を収集した。インフォームドコンセントにおいては、インタビューにおける口述内容の録音および掲載、ネット上での公開に同意する旨を口頭で記録できた対象者を分析の対象とする。インタビューは新型コロナウイルス感染予防のため、オンラインで行うことを原則とし、1人当たりのインタビュー時間は30分から1時間を限度とし、全ての項目以外にも必要に応じてテーマを掘り下げる半構造化の形式をとる。

2 インタビュー対象者の概要

本研究では地方都市に住む大学生と地方都市から上京した大学生を二つのグループに分けてインタビューを行った。これらの対象は大学進学時に地元にとどまるか、上京するかを選択してきたものに限定している。具体的には福岡県福岡市の私学中高一貫校を経て東京の大学に進学した者と、地元の福岡県の大学に進学した大学生である。インタビュー対象者の概要を下記の表で整理する。

表1 インタビュー対象者概要（福岡市在住）

仮名	プロフィール	卒業後の進路	インタビュー日時
F1（20代男性 国公立大学4年）	福岡市の私立高校から地元の国公立大学へ入学。学生時代には応援団やアルバイトに注力。	就職先は東京	2020年9月2日
F2（20代男性 私立大学4年）	福岡市の私立高校から地元の私立大学へ進学。薬学部在籍。バイトやサークルに所属している。	地元の大学院へ進学予定	2020年9月6日
F3（20代男性 私立大学3年）	福岡市の私立高校から地元の私立大学へ進学。F2と同じく薬学部在籍。	就職に関しては未定	2020年9月10日
F4（20代男性 国公立大学4年）	福岡市の私立高校から地元の国公立大学へ入学。物理学を専攻し、地元の大学院へ進学予定。	地元の大学院へ進学予定	2020年9月20日

表2 インタビュー対象者概要（首都圏在住）

仮名	プロフィール	卒業後の進路	インタビュー日時
S1（20代男性 私立大学4年）	福岡市の私立高校から指定校推薦を受けて東京の大学へ進学。学生時代はサークルやアルバイトなど経験。現在は公認会計士のための資格勉強中。都内在住。	都内の大学院へ進学予定	2020年9月2日
S2（20代男性 私立大学4年）	福岡市の私立高校から東京の大学へ進学。大学生になっても高校の友人との関係を重点的に継続。就職活動を経て東京で就職予定。	就職先は東京	2020年9月4日
S3（20代男性 私立通信制大学2年）	福岡市の私立高校を卒業し、東京の私立大学の通信教育課程を受講中。首都圏に1人暮らし。アルバイトは都内勤務。	就職に関しては未定	2020年9月5日

V インタビュー結果の分析

1 地方に残留した人々

調査対象は、大学進学のために東京か地元に進学することを経済的に選択可能であった福岡市に在住する若者に絞り調査を行った。彼らは同じ進学校に通い、受験や指定校推薦等で東京に進学することも可能であったが、福岡県の大学へ進

学することを選択した。東京一曲集中が進むなかで首都圏への移動可能性を持つ若者がなぜ地元にとどまることを選択したのか、また、地元で生活するなかで首都圏と地方都市である福岡市にどのような「格差」意識を持ったのかを4人の事例をあげて分析する。

(1) F1さん ～東京への憧れはなかった、しかし就職先は東京

F1さんは福岡の国公立大学に進学した理由は、「行きたい大学が福岡にあったから」と、語った。東京に対する憧れは大学入学前から今に至るまで一回も感じたことはないそうだ。東京と福岡の違いとして、イベントやアーティストのライブといった文化的側面で東京が福岡より進んでおり、そのようなイベントが最後に回ってくるのが福岡という印象を抱いている。しかし、そのようなイベントにはあまり興味がなく、福岡で全て事足りており、「福岡は自分にとってホームであり、天神（福岡にある繁華街）みたいな都会もあり、山や海といった自然もあるわけで、なにより安くて美味しいものを食べる」ということで東京に行く必要性は全く感じていなかった。

大学生活に関しても福岡で過ごす満足度は総じて高く、1～10で例えると8点をつけられると自信をもって答えた。ただし、就職活動とアルバイトに関して低い満足度評価をしている。何より就職活動において地方と都市の格差を感じている。福岡と都市の情報量の違いや合同説明会の数が圧倒的に少ないことで苦勞し、また首都圏の企業のインターンシップなどは交通費や宿泊費が支給される企業のみエントリーしていた。「首都圏にいかないといろいろな企業を見ることができないし、ネット上の情報だと限りがあるし、インターンも東京限定で開催されるところが多い。人脈がいくら福岡で広くても東京に行かないと得られない情報があるんじゃないかなと思って、実際に東京まで社会人に会いに行った」。

こうした就職活動を経て、行きたい会社が見つかり、内定をもらった。東京の会社に行くことを決めた理由として、出世してたくさん稼ぐためには東京しかないというイメージがあったと語る。実際に福岡ではアルバイトの時給も安く、求人も少なく、バイト探しに苦勞した過去がある。F1さんにとって、経済的達成、つまり出世を目指したいが、ほとんどの会社の本社が東京にあるので、福岡にとどまると出世はできないと考えている。福岡でできない唯一のことは、出世や稼ぐといった経済的成功であり、経済面や仕事面で考えると東京に行く意味はあるが、それらの要素を除いて東京に行く理由はないと今でも考えている。

他にも「東京は人が多くて構ってくれないし、道を開けたりする人もいなかったし、自分で何とかしないといけないような感覚がある」と東京に対するイメージを抱いている。

F1さんは、福岡と東京に関する格差意識は就職活動以外では感じたことがなく、福岡での生活に満足している。福岡に関して、自然と街が程よく混在し、何不自由なく暮らしていける場所として満足感を示している。しかし、就職活動では首都圏以外の地域は圧倒的に不利な状況にあることがわかり、選択肢は狭まり、就職活動の経済的負担が大きくなることで、首都圏と地方都市の格差を意識している。大学での生活には満足しており、学習環境に関して地域間の格差の意識は見られなかったが、経済的達成や「成功」は、東京でなければ成し遂げられないものとしてF1さんの意識に強く根付いている。

(2) F2さん ～知らない場所よりは、知っている場所で暮らしたい

東京よりも住み慣れている福岡の方が良いという理由から福岡の私立大学に進学した。F2さんにとって福岡での暮らしの満足度は10点満点で8点と高く、福岡に住んでいて物足りないと思ったことはなかった。東京に対する憧れも、それほどない。強いて言うなら福岡の方が『週刊少年ジャンプ』の発売が遅れたりすることが彼にとっての「地域間の格差」という認識である。よく女友達と話していて、東京に行きたいという声を聞くが、自分は特に行きたいと思っておらず、女子はオシャレとかファッション的な意味でも東京に行きたがるのではないかと感じている。東京は遊びに行く場所としてはいいかなと思ひ、最近福岡の周辺も行き尽くしたようで、どこでもいいから新しいところに遊びに行きたいと語っている。

現在は薬剤師になるために資格勉強をしているが、資格の塾は東京の方が合格率が高いと聞き、資格勉強に関しては東京で受講して通学する方がいいと思っている。東京は情報が集まり、人も多く盛り上がりのある場所といったイメージを持っているが、積極的に東京に行きたいとは思っていない。一方で福岡に住むことに関しては、「地元にはたくさん友達もいるし、実家に近いし災害も少なく、そして食べ物が美味しい」と肯定的な意見を持っている。将来福岡に住み続けるかどうかはまだ考えていないが、災害が少なく住みやすいところであればどこでも良いと考えている。しかし、積極的に東京に行こうとは思っていない。

大学生活において大変なことも多かったが、友人や家族が近くにいたことが心の支えになっていた。F2さんにとっていろいろな場所に心の拠り所となるコミュニティがあり、何か問題があった時には人との繋がりが支えになっていた。「東京と福岡ではモノとか情報といった面は見ない。福岡よりも東京は確かにモノや情報にあふれていると思うが、そこはあんまり魅力を感じない」と地元を人の繋がりがや暮らしやすさといった面から肯定的に捉えている。

F2さんはF1さんと比べて、福岡在住に対する存在論的要素から福岡を評価しており、地元に対する肯定的な意識を持っている。東京と福岡の情報やモノの間に存在する差には気づいているが、それを地域間格差としては捉えていない。それ以外の要素、つまりF2さんにとっては家族や友人のような存在論的な充足感に重点を当てて福岡在住に対する高い満足感を示している。拠り所となれるコミュニティを複数持つことで安心感を得られる場所であることが、地元にとどまる理由となっている。一方で資格試験では東京の方が合格率も高いといった現状に地方と都市の格差を感じており、資格合格への理想的な勉強環境は東京のほうが有利であると捉えている。

(3) F3さん ～地元強い愛着をもち、上京には否定的

父親に地元に残って欲しいと言われたことと、一人で東京に行くのが少し不安であったことから、福岡の私立大学に進学し実家から通学している。首都圏との地域間格差について感じることは少なく、「東京に対する憧れとして、地方の人が抱いているようなものは全くない。福岡が一番と思っているから」と地元に対する意見を持っている。また、福岡で手に入るものと東京で手に入るものに違いはないと考えている。そのようなことから福岡の暮らしに対して10点満点中10点をつけてもいいほど満足に感じている。しかしコロナ禍であることや、彼女がいないことから、私生活の満足度は10点満点中3点と低い評価をしている。

唯一東京に憧れたかもしれないという経験は、東京が舞台となる映画等に出てくる撮影地に行ってみたい気持ちがあったことだった。また、趣味の映画に関して、東京にはミニシアターというものがあり、鑑賞できる映画の種類は東京の方が圧倒的に多く、福岡には少ないことは格差の意識として持っている。一方で福岡にとどまることのメリットは、ご飯が美味しいことである。福岡にかかわらず、将来薬剤師を目指しているF3さんは、田舎の方が給料が高いという薬剤師特有

の事情もあり、田舎で働くことも考えている。何より田舎の方がゆるく楽しく働くことができる認識が強い。

F3さんは、東京を否定的に捉えている。親の反対、そして上京に対する恐怖心から地元にとどまることを選択した。東京に対する憧れは全くなく、地元に対する愛着が強い。このように地元在住の満足度は満点と言い切れる一方で、私生活に関してはパートナーの有無や新型コロナウイルスによる行動制限によって満足度は低く、地域に対する満足度と私生活における満足度は必ずしも連動しないことが示唆される。

地方都市在住に対する視点として、「ゆるく楽しく」といった肯定的な意識が観察された。東京などの大都会で生活することに対しては「不安」な印象をもっており、大都会へ移動することは居心地の良い環境を離れて、より厳しい環境に適応していかなければならないというイメージを持っている。

(4) F4さん ～中学受験で感じた地域内格差

東京への進学は自身のレベルに合わなかったため、志望校を地元の国公立にした。かといって東京への憧れは全くない。昔は確かに東京に憧れる気持ちはあったが、実際観光などで東京を訪れた際に、あまり福岡と変わらない印象を受けた。福岡で生活していても全く不自由することはなく、仕事で東京に行かなければならないといった理由以外で東京に行く意味はないと感じている。福岡に対する満足度は10点満点で8点と高いが、強いていえばもっと自然があれば満足度は上がっていた。

私立の中学高校に進学したことが彼にとって大きなターニングポイントとなった。地元の公立中学は不良が集まる学校として有名であり、両親からも中学受験を勧められ、早くから準備をしていた。小学校の授業も面白くなく、レベルが低かったのにもかかわらず、多くの生徒が理解していない様子を見ると、彼らのレベルに合わせて中学まで行くのは少し嫌だなと思った。親からの助言と、自身が感じた小学校での違和感から私立中学を受験し入学できたことはとても良い結果になり、今の自分があると感じている。このように勉強面でも福岡で満足でき、学生として生活することで何ら不自由を感じてこなかったため、福岡に対する居心地の良さは強く、当初は東京に憧れていたが、東京に住む必要性を全く感じなくなった。

F4さんのケースでは、福岡に住むことへの満足の背景に小学校受験という選択が大きく作用している。F4さんの場合、東京と福岡の地域間格差よりも福岡での地域内格差についての語りが中心となっている。地元の公立中学は彼にとってレベルが低く、保護者が私立受験を勧めた。そのために、小学校から塾に通わされ、小学校の授業レベルにも違和感を抱くようになった。塾へ通えるという家庭の経済的余裕や、教育に関する保護者からの助言が当時のF4さんの意思決定に与える影響が強かったと考えられる。東京や福岡といった地域間の格差のみならず、地域内においても所得や階層の違いによる格差が存在する。このような格差が顕著に現れるのが公立学校へ進学するか、私立に進学するかという選択時である。地域の特徴によって生徒集団の質に悪影響が及ぶ場合に、地域的制約を超えて進学先や住居を選択し、移動する経済的余裕や社会的階層を有するものとそうでないものとの間で、分断が現れることも示唆される。

(5) 小 括

地元である福岡に残留したインタビュー対象者の語りでは、総じて東京と地元との地域格差の意識は弱い。資格試験の対策や就職活動以外における地元での生活への満足度は非常に高いものとなっている。また、より多くの機会や成功を求めるためには東京へ行かなければならないといった意識が存在する一方で、先行研究でも言及されたような東京とさほど変わらない地元での生活環境・消費環境に満足している現状がある。

また、より競争的で生きにくさを感じる東京での生活を敬遠し、地元でほどほどの生活を営む地元志向が確認された。就業機会や情報の質、物質的な豊かさで圧倒的優位にある首都圏は、生きづらさを生み出す場所でもあり、地元のゆるい雰囲気の中かで、既存の人間関係の繋がりなどの存在論的要因を重視する若者にとっては好ましくない場所として捉えられている。ここで、地方暮らしの若者を「マイルドヤンキー」として描写した先行研究がある。確かに、地元にとどまることを好む若者の描写として「マイルドヤンキー」はある程度説得力のあるものである。しかし、本インタビューを通して、地方都市に暮らす若者は、好んで地元にとどまっているのではない。地方都市での生活、教育、機会に満足しているが故に地方都市から移動する必要性を感じていないのである。つまり、地元にとどまることを一方的に「上昇志向が低いマイルドヤンキー」として描写することは地方都市に暮らす若者の多様性を見落としている。

一方、教育機会や就業機会という点での格差意識は顕著に観察できた。より望ましい教育環境や職業の選択肢、給与などで東京に一極集中する教育機関や企業の現状を考えると、地方都市で暮らしているながらも、より高みを目指す場合は首都圏が強く意識される。

とりわけF4さんのケースでは、福岡における地域内の格差に焦点を当てる必要性が示唆された。地方都市においても、都市部とそれ以外の地域区分が存在し、その両者の間に格差が生まれる。同じ地域内においても階層や経済的余裕、教育に対する保護者の価値観等が子供に与える影響は様々であり、幼い頃から私学や名門校に進学することは、将来の選択肢を広げる手段であることがわかる。そのため、私立中学、高校、大学と教育水準が上がるにつれて特定の地域に同質な階層集団が形成され、地域内における階層的分断を促進していると考えられる。今回の研究フィールドでもある福岡市は政令指定都市でもあり、教育水準に関しては福岡県内においても高く、福岡市に集中して進学の実績や教育の機会が充実していることがわかる。

地元に残留したインタビュー対象者の地域間格差への意識が弱いことには、比較という問題も存在する。先行研究でも述べられていたように、地元から離れたことがない若者は地元を大都市と比較する十分な情報や経験に乏しい。このことが地域間の格差意識の弱さを規定している。比較しないことが幸福度に直結するという先行研究の知見に基づいて、インタビュー対象者の若者の地元に対する満足度が高いことが説明可能である。

2 地元から出て上京した人々

(1) S1さん ～人脈を求め東京へ。現地で感じる劣等感との葛藤

地方の小さなコミュニティに限界を感じ、いろいろな人との出会いを求め、人脈を広げるために東京の私立大学に進学した。福岡と東京で感じた大きな違いとして、交通網の充実やアクセスの良さを挙げ、学校生活においても良好なアクセス環境の整っている東京で様々な人間と接することができて満足している。上京時には劣等感を抱き、東京で出会った人は、マウント²⁴⁾を取り、自分を優位に立たせるようなコミュニケーションが多くて、有名御三家の学校など、学歴マウンティングが大学1年生の時に多く圧倒された」と振り返る。また、海外で長い間過ごした人や帰国子女など、多様で豊かな背景を持った人が多く、そのような人に囲まれることで劣等感が増し、「地頭の良さ」を地方と都市で比較していた。

そのような劣等感は自分の能力の有無ではなく家庭環境や周囲の環境の影響があると感じており、東京であれば両親が重役などのポストに就く人々が集まり、自ずと子供に対する教育の質も高まると考えているという。このように、東京は自ずとレベルの高い人々が集まる場所として認識している。劣等感を乗り越えるために、レベルの高さは自身の能力の有無ではなく、育った地域の違いの問題として割り切って理解した。さらには学外での友人関係を広げることと、自身の専門である会計分野の知識を磨くことで自信を身につけた。

会計士に向けての勉強の環境としては有名講師が集う東京という環境が理想的である一方で、コロナ禍の影響で質の良いサービスがどこにいても受けられるようになったという変化を感じている。友人関係においては、大学に限られた交友関係ではなく、学外に友人を作り、様々なバックグラウンドを持つ人々と交流をしている。特に北海道から上京した友人は自分自身と生い立ちや家庭的背景が似ており、親しくしている。東京での生活で感じた不安や困難を乗り越えるためにお互いが支えあっていた。

東京での暮らしに関しては、人の出入りが多く、ご近所付き合いもないに等しく、良いもの志向な消費傾向で物価が高いといったことを挙げている。一方で福岡では近所の人々との結びつきも強く、安く美味しいものが食べられると、生活面では福岡が理想的な場所としての認識がある。S1さんにとって東京に行く意味とは、成功や出世といった意味合いが強い。将来は税理士として活躍するという目標を持つ彼は、東京で関わる人間関係が将来的な顧客になる可能性もあるので、人脈を広げるためにも東京に住むことは必要なことなのかもしれないと考える。より多くの人々と出会い、多様な人脈を作れた点で、東京に行ったことは良かったと今までの大学生活を振り返って評価している。東京に住むことに対する満足度は10点満点中8点で、人脈以外にも、人との交流を容易にする交通網の充実という点に満足している。

S1さんは東京と地元を比較し、地域間格差の意識として「能力」の差に言及している。さらに、会計士資格の勉強に関しても、有名講師が集まる東京の学習環境を地元と比較している。S1さんはこのような格差に対して、地域差もあり、東京に能力が高い人々が集まることはしょうがないことであると割り切っている。このような格差体験に対して、友人関係を充足させ、他人との比較をやめることでS1さんは自身の劣等感を乗り越えた。

F1さんのケースと同様、S1さんも仕事における成功は、様々な人脈を持つことができる東京でしかなし得なることができないものとして認識している。一方で、生活面では地元に対して肯定的な意見を持っていることから、生活・消費環境面では東京と地方都市では大きな相違がないことを裏付けている。

S1さんには、より高い目標やチャンスを得るためには東京という地域が有利であるという認識があり、首都圏が優秀な人材を引きつける地域的特性を持っていることがわかる。しかし、首都圏で生活することが幸福感に直結するとは考えにくい。地方から上京する若者にとって、東京と地元で感じる「差」に対する向き合い方によって本人が抱く地域間の格差意識が変わってくると考えられる。S1さんのように、友人関係の充実や広い世界を見ることで自身の成長に繋がったことを肯定的に捉えている点においては、地域間格差を乗り越えた一つの事例であると考えても良いのではないか。

(2) S2さん ～恵まれた就業機会、働く場所として理想的な東京

情報の伝達や発信が早い環境に身を置くために東京への進学を決意。東京は情報が生成され、企業系のニュースも東京が主体である。流行も経済も東京中心で福岡にはそれらが遅れて伝達されるという感覚を持つ。福岡と東京の地域間格差については直感的ではあるが、感じていた。特に就職活動では、内定をいただいた社長との話のなかで、地方の学生は東京の学生よりも就職活動の準備が遅れていると聞き、地方と都市の学生の意識の違いを感じた。何より、東京では、就職活動が圧倒的に有利だと感じ、交通費や宿泊の問題もなく、いろいろな企業を見ることができた。東京は「欲しいものをその日のうちに手に入れられる感覚があり、パッと思いついたことに対してすぐ行動できるような交通網も整っているから東京に行けたことを親に感謝している」と東京での生活に満足している。

このように就職活動や東京在住に対する満足度を10点満点中9点と高く評価していた一方で、友人関係においては満足していない。もともと交友関係を広げるタイプではなく、東京で友達を作るモチベーションがなかった。その理由として東京では既成の友人関係の輪ができており、そこに地方出身者が飛び込むのは難しいと感じた。高校の友人との交流を続け、東京での交友関係は狭く、周りと比較する機会も少なかったため、福岡出身だからという理由で劣等感を抱くことはなかった。

一番格差を感じたのは就職活動で、就活を経験する上で東京は恵まれた環境だ

と思っている。「やっぱり就職は東京有利で、地方から就活でこっちに来てる人のほやきをよく聞く」と就職活動の格差は強く意識した。働き方としては、働き盛りの時は東京でバリバリ働き、年齢的に落ちていたら福岡に帰ってくることも考えているという。何か大きなことをするのであれば東京に出て行くしかないかと、東京の有する豊富な機会を福岡と比べている。

S2さんのケースでは、地域間の情報格差を認識しつつも、東京に移動したことで「東京に住むこと」の恩恵を受けているため、格差意識がそれほど否定的なものになっていない。S1さんと同じく、交通網の充実に対する満足度が高く、交通アクセスによってより多くの機会を得られたことがわかる。また、就職活動では地方在住者よりも優位な立場にあったことから、就職活動における劣等感はなかった。就職活動に際して、地方から東京に来る人の「ほやき」をよく聞くと述べている。そのことは、就職活動において首都圏とそれ以外の地方で格差があることを示唆しており、自身が首都圏にいたことでその格差を被ることがなかったという首都圏に住む若者の側からの意見を述べている。

その他の要素において劣等感を感じなかったことについては、東京での友人関係、つまり比較の対象となる人々との出会いが少なかったことにある。新しい環境での人間関係が最小限にとどまったことが比較による劣等感を生じさせなかった要因となったといえる。

住む場所ではなく、働く場所として東京が理想的であるといった意識はその他のインタビュー対象者にも見られた傾向であり、東京への上京は成長の機会と捉えている。一方で、地元は東京で様々な経験をした後に戻る場所として意識し、地元への帰属意識は依然強いことがわかる。

(3) S3さん ～都会で感じた能力の差。ネットと上京の関係性

高校の友人の多くが東京へ進学しようとしていたことに影響を受けたことと、とにかく一人暮らしがしてみたかったこと、そしてアニメなどのイベントが開催されるのが東京なので東京への進学を決意した。そもそも、通っていた私立高校の友人が東京を目指していなかったら自分自身も地元の大学に進学する予定であった。

コロナによりイベントが全てオンラインになったことで、東京に住む必要性を感じることはなくなっている。何より物価も高く、友人などとの金銭面に対する

感覚の違いと、家庭教師のアルバイトを通じて時給の高さと、教える生徒の学校で最新のタブレットを用いる教育が取り入れられていることに地域間の格差を感じている。

仕事観については、数年東京で揉まれて、ある程度都会生活を経験して福岡に戻る計画である。「就職先は、数年東京、のちに福岡ってというのが一番理想。東京で揉まれてある程度経験して、ゆるい福岡に戻りたい。単純に福岡が住みやすいから。車がなくてもチャリでどこでも行ける。仕事で揉まれたいという希望もあるし、通勤ラッシュを経験して福岡でのゆるさを実感したい」と地方に戻ることに対して肯定的な意見を持っている。また、地方で働くことに対しては完全に個人の能力次第というよりも、周囲の協力もありほどほどに生活していくことができる感覚を持っている。「地方であっても能力は必要ではあるが、何かしらの温情はありそう。能力とは別の要素で地方では生活していくことができるんじゃないかな。能力がある人が東京に集まるといった感覚はあるし、能力がある人はとりあえず東京を目指すイメージ」と地方での暮らしやすさを意識する一方で、能力面では首都圏が優位にあると述べている。

S3さんは、東京で様々な人と交流することで、能力の差に劣等感を感じた。「単純に能力差があった。自分ともそうだし、高校の時のトップをみて、こいつらが日本全体でみてもトップかなと思ってたけど、東京に出ると、俺らの景色って何だったんだろうっていう。東京に出て、エベレストの頂上を見た感じ。絶望感を感じた。例えば、株で暮らしている友人。スマホで数億稼いだって言って、そんなことあるの？ という経験もある。俺らの理解の範疇を超えていた時があった」と上には上がいることに圧倒される。東京に集まる人が自ずと高い能力を持っており、その子供もロールモデルの存在を通して能力が受け継がれるのではないかと分析している。

しかし、コロナでオンライン主流になり、東京に行く必要性は感じなくなった。人間関係も地元の友人とつるむ方が楽しい。仕事面だと、選択肢が多い東京が理想的だとは思いますが、それもオンラインで福岡からでも可能なことが増えてくるかと思うと、物理的な場所は関係なくなると感じている。「格差は問題ではないと思う、しょうがないと思う。日本の中心は東京だから。そもそもインターネットの中で生きている人間としてあんまり地域間格差は関係ないと思った」と普段の生活でネットが占める割合が多いことと、コロナによるオンライン化の発展で東京に住む必要性はなくなっているとの意識が強い。

普段インターネットを中心とした生活を送るS3さんにとって、サブカルチャー関連のイベントが開催される場所として東京が中心であるといった意識があり、文化的発信地の中心として東京が捉えられている。しかし、デジタル化によって物理的な移動も少なくなった昨今の社会情勢では、東京に住む意味が再び問われている。また、そのようなデジタル化による地域間格差の是正へ向けた方向性も見いだすことが可能であるかもしれない。

一方で、上京を通して地元中心の世界観が広がったと同時に、レベルの高い環境に身を置いたことで地元との「差」に愕然とした。このように東京をはじめとする首都圏に移動する地方の若者が感じる「差」とは、首都圏のレベルの高い集団によって共有されている価値観や機会であり、地方に住む限り触れる機会がなかったものであるといえる。例えば株をして稼ぐ友人との出会いは、S3さんにとって大きな衝撃を与えている。このように、想像を超えた人々との出会いを経て、地元と首都圏での差を「能力」としてS3さんは表現しており、若者の質が住む地域によって異なることを示している。また、教育面でも東京では先端的な方法が導入されている点に格差意識を持った。さらに、東京はエリート志向の若者が集まる地域であり、その意識が親から子供へと世代間に受け継がれて、より東京の地域的特徴としての優位性は加速していくとの認識がある。

仕事面においてはS2さんと同様、東京で経験を積み、十分に成長した後に地元に戻るといった計画を持っている。しかし、注目すべき点として、地元を「緩く、楽しく」とF3さんと同様の視点を持っていることで、地方都市は若者にとって一生懸命に努力しなくてもどうにかなる環境という捉え方をしている。

(4) 小 括

地元から上京したインタビュー対象者の事例では、総じて首都圏在住に対する満足度は高く、その要因として公共交通機関の充実、広い人脈の形成やレベルの高い環境での自己研鑽がある。しかし、インタビュー対象者は、首都圏での生活を肯定的に捉えると同時に、首都圏と地元との間に存在する格差を意識している。能力の差、仕事を得られる機会の差、収入の差、教育の差など様々な側面において地元との格差を認識していた。中には劣等感を持つ者も見受けられた。それらは、地方都市である地元では経験し得ない出会いを通して、満足していた地方都市での暮らしが、首都圏との比較により「劣ったもの」として認識されたことにある。

調査対象者に共通して見られた特徴として、上京経験を肯定的に捉えながらも地域間格差を「仕方がないもの」と認識していることだ。言い換えると、諦めとして地域間格差を意識していることがわかる。調査対象者が体験した能力の差は、首都圏における充実した機会との接触が教育や能力に良い影響を与えた結果であり、地元にいる限りそれらは経験することができないものであるという認識もある。これによって上京時に感じた能力の差は、努力ではどうすることもできない格差であるとの認識が強い。

このような格差認識が存在する一方で、上京組の若者が感じた劣等感を乗り越える個人のアプローチは多様なものであった。似た境遇の友人を探し、周囲との比較を避け、自身の強みを生かす人もいた。また、高校時代の友人関係を東京でも継続することで東京での存在論的要因の不足を相殺し、就職活動でも東京在住のメリットを最大限に生かすことで上京経験を肯定的に捉えるケースもあった。さらに、デジタル化によって従来の地域間の制約から解放される可能性も見だし、地域移動の必要性を見直す意見も存在した。また、上京組の対象者全員が、ある程度の職業経験をえたあとは地元に戻りたいという希望を持っている。地元は「ゆるく楽しく」過ごすことができる環境で、地元が受け皿的存在として意識されている。つまり、首都圏に在住しながらも帰属意識は地元にあることがわかる。

3 まとめ

調査対象者は共通して地元への帰属意識が強いことがわかった。そして東京へ移動することは「より高みを目指す」「広い世界を知る」「成功」「出世」「人脈形成」「教育的達成」を意味する場合が多かった。対照的に、地方にとどまることに対しては「ゆるく楽しく」「安心感」「住みやすい」「便利」といったイメージが目立った。一方で消費環境的にも地方都市と大都市の差は縮まっており、インタビューでも生活面からは首都圏と地方都市での満足度に有意な差はみられなかった。

福岡に住むインタビュー対象者の地元に対する充足感は、友人や家族との繋がりとといった存在論的要因や何不自由のない生活環境、首都圏との比較機会の少なさから高くなっていた。一方で上京した対象者は、地元と首都圏の格差を意識した時期があった。前者は先行研究で述べられた知見とほぼ等しい。後者の上京した若者が持つ地域間格差意識は、先行研究の「比較」による地方都市と首都圏の

相対化によるものであるといえる。また、上京した若者が格差に起因する劣等感を乗り越えられたケースも見受けられた。

この調査結果から、本研究における地方都市の若者の描写ができるとすれば、次の二つが考えられる。一つは地方都市に満足し、移動の必要性を感じないもの。もう一つは、より広い世界で挑戦してみたいという志のあるものである。この二つは、マイルドヤンキーの分類には当てはまることはなく、地方都市の若者の描き方に新たな視点を与えてくれた。特に、上京する必要性を感じていない地方都市の若者の描写は、地域間の格差を認識する以前の問題として、格差を意識すること自体が難しい立場にある。しかし、F1さんのように、就職活動では地元を超えて活動し、地元と首都圏を相対化した場合もあった。このケースでは、就職面で首都圏が優位であることを痛感し、F1さん自身の進路も首都圏への上京という方向性に至った。

調査対象のなかでは、地元暮らしでありながらも就職を機に上京する事例や、資格試験において東京が有利であるといった意見があった。そのことは、地元と首都圏を比較・相対化した時にみられる傾向である。つまり、地方都市にとどまる若者でも、就活や資格試験の合格率など、地元と首都圏を相対化する機会にさらされることが首都圏への移動を生み出すといえる。また、先行研究により、その相対化によって首都圏の優位性を実感することから、地域間格差意識を生むことにも繋がる。

VI 考察——地域間格差をどう生きるか——

1 何が「格差」と認識されているのか

インタビューを通して若者の意識に顕著に現れたのが大都市と地方の情報や機会の不平等である。文化的催しに関しても大都市に住んでいることで多くの機会を享受することができ、教育の機会については、資格試験の塾や優秀な講師の所在、大学の多さとその教育内容の多様性においては首都圏に資源が集中している。つまり、首都圏に住むことで自ずと地方や地方都市よりも多くの選択肢が与えられる現状がある。企業も東京に集中していることで、就職活動も影響を強く受けることになる。能力の差は、恵まれた環境にある首都圏とそれ以外の地域で生まれたもので、仕方がないものとして感じたのが上京した調査対象者の経験ではないだろうか。

もちろん、所得格差や教育格差といった要因も地域間格差に関係していることは確かである。しかし、上京した地方都市の若者にとって、人生の選択肢は所得や教育よりも、「機会」に依存すると認識されている。若者の周囲に存在する環境やロールモデルとなる人々との出会いなど、首都圏に身を置くだけで豊富な機会と出会い、それが首都圏とそれ以外の地域における就業や教の格差を広げる要因となる。このような機会の不平等は、地方都市にとどまる選択をした若者にとっては意識されないことでありがちだが、地方都市から大都市へ移動する若者にとっては大きな障壁として認識されている。実際にインタビュー対象者のうち、上京した若者が周囲との差から感じる劣等感、地元にとどまっていた時では出会えなかった多様な人々や機会を目の当たりにしたことから生じた場合が多かった。さらに、就職活動を経て、その格差を実感した地元暮らしの若者の存在もある。つまり、地方都市でありながらも依然として教育の機会、ロールモデルとの接触機会、将来の就業の選択肢などの機会において、首都圏には及ばない現実があり、それを若者は「格差」として認識する。

2 地域間格差は問題か

所得や教育といった格差が地域間格差を生み出すのだから、地域間格差は大きな格差問題の一つでしかありえない。その上、インタビュー対象者の多くが東京で感じる格差に「仕方がないもの」といった認識を抱くことから、地域間格差はあくまでも個人的な経験に帰着され、社会的な問題として認識されていない。また、上京せず、地元での暮らしに充足感を見出す若者が多いこともインタビュー調査で明確になった。つまり、必ずしも地方都市に住む若者が地域間格差を問題として認識しているとは言い難い。

それゆえ、地域間格差は個人の捉え方によって問題かそうでないかが分かれる。地域間格差について議論する際、自分にとって準拠可能な集団、つまり地方から上京することのできた一部の集団内だけの議論として偏りが生じてしまう。その結果、「個人の捉え方次第」や「限られた集団での話」という理由で、地域間格差の問題が見過ごされる傾向が生じているのかもしれない。

しかし、地域間格差の問題は近年、地方在住の若者自身が執筆したエッセイ等で取り上げられ、話題となっている。たとえば「note」というコラム投稿サイトの一つの記事が2万人近い人々の目に留まり話題となった。「この割れ切った世界の片隅で」というタイトルで長崎県在住の女子高校生が東京との格差経験を記

録したものである。彼女は、人々が自分自身の見えている世界を「ふつう」であると錯覚してしまっている日本社会についての問題を指摘した。そのような指摘は多くの共感を集め、メディアにも取り上げられるようになった。彼女は地元の長崎県での幼少期から学生時代の体験を綴る上で、東京でのスピーチコンテストやサマーキャンプでの体験を記したものがある。そこでは、東京で出会う帰国子女や有名私立校出身の同世代の学生たちに圧倒され、別世界コンプレックスを抱いたとある。長崎で生まれ、彼女自身が様々な家庭環境を持つ友人との交流やフィリピンでの劣悪な環境で暮らす子供たちとの交流を通して、東京で暮らす友人の「ふつう」は実際の世界ではほんの一部にしか過ぎないことを指摘している。なお、文中で彼女は東京で出会った周囲に存在する優秀な中高生に対して、「自分が生んだ成果はすべて自分の努力のお陰だなんて思わないこと」と述べている²⁵⁾。

彼女のコラムは、本研究でインタビューした上京組の語りと重なる部分がある。それは東京と地方都市で感じる能力の差である。これが2万人を超える読者からの反響を得たことから、このような「別世界コンプレックス」を抱く人々の存在は少なくないのではないか。別世界コンプレックスを抱く要因となったのが「能力」であれば、それが形成された教育環境における地域間格差が背景にある。

地方都市に残る若者は地域間格差に対する問題意識を抱いていない一方で、地方都市から上京した若者はこのコラムの筆者のように東京と地元の「差」を感じて生きている。地元に残ることが東京へ上京することよりも充足感を得られるといった意識は、東京一極集中に対する対抗文化にもなり得る。しかし、豊富な機会に巡り合うことで、地元にとどまるより上京したことが肯定的に受け止められる事実もある。地域間移動を経験する若者の意識において、首都圏とそれ以外の地域に明確な格差が存在するのは明らかであり、今現在地元で暮らす若者が上京しようとする、上記のような格差を目の当たりにしてしまう。

もうひとつのコラム『「底辺校」出身の田舎者が、東大に入って絶望した理由』の筆者は高校時代まで北海道の釧路市で過ごし、東京大学に進学した。しかし、進学先では名門高校出身の集団に圧倒され、田舎に住んでいたことで想像以上のハンデを背負っているという地域格差を感じた。その体験を記事にしたところ、オンライン上で「自分たちの鬱憤を言語化して代弁してくれた」と大反響を呼んだ。筆者は田舎の子供達の多くが大学進学や文化的機会の選択肢も与えられないまま生涯を過ごすことを強いられていると主張している。また、進学に対する筆

者の意見として、「田舎から都市圏の大学に進学するということは、たまたま容姿に恵まれて街角でスカウトされることに似ている」、「努力の成果ではなく、偶然の結果に過ぎない」と田舎における教育機会についての脆弱性に言及している。このように田舎に住むことは、知っていれば受けられていたはずの教育機会を子供たちから奪っていると主張し、都市と地方の地域間格差を批判した²⁶⁾。このように地域間格差の実態を露わにした記事に対する反響は大きなものであり、共感する声から批判の声まで様々な意見が寄せられた。その批判の一部として、この記事の続編で筆者は「ルサンチマン」であるという指摘を受けていた²⁷⁾。

これらのコラムには、共通している点が見受けられる。一つはどちらも多くの反響を呼んだことである。多くの人々の共感を呼んだことは、声には出せないがそのような思いを持っている人々が大勢いることを示唆している。もう一方では、個人の努力ではなく偶然、つまり周囲の環境に個人の成果を起因させるという論理である。

これらのコラムでは、地域間格差は地域移動が可能で上京することを自らの意思で選択することのできる、高い志を持った階層集団内で議論される極めて限定的な問題として捉えられている。それゆえ、地域間格差を問題として捉えることは、上京に伴う苦悩や劣等感に基づいており、自身の力不足を正当化するルサンチマン²⁸⁾的な思考であるとの批判も多い。しかしこれらのコラムが多くの人々の反響を呼んだことは、同じような上京経験をした人々の語られざる紛れもない事実を言語化したものである。そのような批判は、地域間格差を個人の捉え方の問題であるかのように指摘し、地域間格差の問題に目を向けようとしていない。

3 地域間格差を乗り越えるために

(1) 存在論的不安を乗り越える

インタビューでは、上京した若者が地域間格差を認識していたが、それぞれが異なるアプローチでその格差経験を乗り越えていたことが観察された。ここでは、大都市への地域移動の際に、若者が直面する地域間格差から生じる劣等感を乗り越える手段を考察する。

先行研究によれば、存在論的要因の充足感が高ければ高いほど、その地域における生活の満足感を得られやすくなる。それゆえ、地域間の格差体験は存在論的要因から充足感が満たされることで軽減される。また、人々の幸福度に注目した先行研究に基づけば、他者との比較に基づかない、主観的な幸福の評価基準を有

していれば地域間格差に対する否定的な意識や劣等感は少なくなると考えられる。

調査対象者のなかで、上京して何かしらの劣等感や差を意識した若者は、同じ境遇の友人や学外での人との繋がりによって自身の感情を共有する機会があった。また、自身の強みを磨き、自信をつけることや、東京に在住することのアドバンテージを最大限に活用すること、コロナによる地域移動の自粛に伴って、場所を問わずに様々な機会を得られることが地域間格差に基づく劣等感を克服する要因となっていた。このことは上京先における複数のコミュニティへの所属や人々との繋がり、オンライン上での情報授受が劣等感に対処していく上で必要な要件であることがわかる。交通網が発達した首都圏では様々な機会に自発的に参加できる環境がある。このような機会は新しいコミュニティの形成に大いに役立つのではないだろうか。また、県人会などの組織も上京する若者にとって一つのコミュニティとして機能する可能性を持つ。

(2) 八ヶ岳方式

東京一極集中への対応策として八ヶ岳方式といわれるものがある。そこでは、地方への大学の誘致、企業の誘致、そして首都機能の一部移転が挙げられている²⁹⁾。これらは地方や地方都市における社会関係資本を充実させ、若者の選択肢の幅を広げる大きなチャンスになるものと考えられる。大学や企業の誘致は、多くの人々が東京へ流入する現状を解消できる効果的な方法である。これに伴い地方における教育サービスの発展も見込める。さらに企業の誘致によって、東京でなくとも若者が多くの選択肢を得られることができる。

この八ヶ岳方式は2017年の政府による報告書『地方創生をめぐる現状と課題』において地方創生の新展開案となっている³⁰⁾。東京圏へ人口転出する主な世代が20代であり、大卒後の就職時や大学進学時の首都圏への転入が顕著なことからも、当該方式は若者に対して非常に有効であると考えられる。企業と大学の分散は地域を超えた社会資本の広がりを可能とするものであり、コロナ禍により地方移住がトレンドとなることで、八ヶ岳方式の実現可能性がさらに現実味を帯びてきたと考えられる。

(3) 地方都市の将来性

インタビュー調査からも示唆されるように、地方都市で暮らすこと自体の満足度は総じて高い。ゆるく楽しく生きていく場所として地方都市が理想な場所と

なっており、消費環境面からも首都圏とそれほど差はなくなっている。それゆえ消費環境面が充足している上に、地方都市を地元とする若者にとっては存在論的要因からも充足感を感じている。大都市圏には成功や競争といった動機で移動する若者が多いのに対し、地方都市は生活の質そのものに焦点を当てて、都会の荒波に揉まれることなく個々人のペースが尊重された環境で暮らしていくことができる場所として若者を惹きつけている。

新型コロナウイルスによる物理的移動の制限によって東京に上京する必要性が薄れた現在、三密が回避可能でありながら消費環境的にも不自由のない地方都市に人の流れが向かうと考えられる。そのような動向のなかで、地方都市は私生活を充実させることができる上に、新たなネットワークの形成の新天地として注目されることが期待できる。

このように地方都市について、インタビューでは肯定的な示唆を得られることができた。しかし、調査対象者から得られた地方都市に対する肯定的な示唆は「生きやすさ」が主になっている。大都会よりも暮らしやすい・生きやすい地方都市という認識は、生きやすさ以外の要素で地方都市が首都圏に上回るものがないことを示唆していることと同じであるといえる。生きやすいといった面で地方都市の将来性が注目されることは、ワークライフバランスを例に挙げても、「ライフ」の部分が極端に強調された場所としての地方であり、そのような偏りを持った将来性が望ましいかは議論の余地がある。

Ⅶ おわりに

本研究では、田舎と大都会という二項対立の視点から述べられる地域間格差ではなく、田舎と大都会の中間に位置する地方都市に生きる若者の視点で地域間格差の認識を分析した。地方都市における生活・消費環境の発展、さらに地元での存在論的要因の充足は、若者の地元暮らしに対する肯定的な認識を生むことがわかった。そのことから、地方・田舎として包摂されがちな地方都市の立ち位置を、都市的機能を有しながらも生きやすい場所として分類することが可能となった。しかし、肯定的に捉えられがちな地方都市でも、首都圏とでは機会の格差や能力の差があることが若者の地域間格差認識を通して明確なものとなった。

地方都市と首都圏との格差が認識されるのは大学進学時や就職活動時であり、地元を離れることが格差認識に強く影響することがわかった。それはつまり、地

元での暮らしに不自由さを覚えていない若者が首都圏へ移動することで生まれる。具体的には、満ち足りている地元での暮らしに満足しつつも、地方都市から首都圏へ移動し、新たな比較にさらされ、地元では出会うことのなかった様々な機会に圧倒された。それによって既成概念や価値観が崩れ、格差認識が生まれている。

地方都市から上京する若者の動機としては、より良い教育機会、就職機会などが多い。だが、そのような志を持った彼、彼女らの前に立ちはだかるのは努力ではどうしようもできない格差であり、それが能力の差として地方都市の若者に意識されている。地方都市に住むことによって得られなかった人脈や機会、能力を地元から離れることで初めて実感・体験するうえに、首都圏に住む同世代はそれらを既に有している。それが地方都市の若者が経験する地域間格差であるといえる。

このような地域間格差は「仕方がないもの」でいいのか。また、地元に残ることで「知らない」ことや、格差に「気がつかない」ことが若者に充足感や地方都市での暮らしやすさを与えているのであれば、地域間格差は問題ではないといえるのか。機会や教育、就職に関していうと、首都圏以外に住む若者は出遅れていることを上京して初めて意識する。一方で地元に残る若者はその事実さえも知る機会がない。

東京一極集中に伴う地域間格差は、個人の問題や仕方がないものとして、上京を経験した人々でさえも見逃してきた問題なのではないか。本研究のインタビュー対象者は格差経験を乗り越える手段を模索した結果、それが良い方向に働いたケースとして偏りがある。しかし、すべての若者が格差を乗り越えられることは一般化できないうえに、地方都市に暮らす若者が将来上京することを選択した際は、このような格差に直面することは避けられない。上京することが若者に格差を生きることを宿命づけるような社会は是正されるべきである。住む場所に限らず若者に同程度の機会と選択肢が与えられた社会が望ましいのではないか。

- 1) 総務省統計局 (2019) 『住民基本台帳人口移動報告2018年結果』〈<https://www.stat.go.jp/data/idou/2018np/kihon/pdf/gaiyou.pdf>〉2020年7月28日アクセス。
- 2) 橘木俊詔 (2013) 『機会不均等論』PHP 研究所、p. 189。
- 3) 速水健朗 (2016) 『東京どこに住む』朝日新聞出版、p. 125。
- 4) 川端浩平・安藤文将編 (2018) 『サイレントマジョリティとは誰か—フィールドから学ぶ地域社会学』ナカニシヤ出版、p. 125。
- 5) 橘木俊詔・浦川邦夫 (2012) 『日本の地域間格差—東京一極集中から八ヶ岳方式

- へー』日本評論社、p. 27。
- 6) 豊田哲也 (2015) 「地域格差に関する概念の再検討」〈https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2015s/0/2015s_100105/_pdf/-char/ja〉 2019年7月31日アクセス。
 - 7) 原田曜平 (2014) 『ヤンキー経済—消費の主役・新保守層の正体』幻冬舎新書、p. 25。
 - 8) 小林直弘 (2017) 「居心地よすぎる東京郊外の地元暮らし」『文学研究論集』47、pp. 89-109 〈https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/dspace/bitstream/10291/19232/1/bungakuronshu_47_89.pdf〉 2020年9月15日アクセス。
 - 9) 同上。
 - 10) 轡田竜蔵 (2017) 『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房、pp. 61-62。
 - 11) 福岡市 (2020) 「福岡市人口推計」〈<https://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/13385/1/20200701suikei.pdf?20200707171137>〉 2020年7月28日アクセス。
 - 12) 小林前掲論文、pp. 29-32。
 - 13) 同上、pp. 127。
 - 14) 橋木俊詔 (2013) 『「幸せ」の経済学』岩波書店、p. 42。
 - 15) 阿部真大 (2012) 『地方にこもる若者たち』朝日出版社。
 - 16) 小林前掲論文、p. 42。
 - 17) 速水健朗 (2012) 『都市と消費とディズニーの夢—ショッピングモースライダー ションの時代』角川書店。
 - 18) 橋木俊詔 (2016) 『新しい幸福論』岩波書店、p. 209。
 - 19) 同上、pp. 161-162。
 - 20) 松岡亮二 (2019) 『教育格差』筑摩書房、p. 50。
 - 21) 橋木前掲書、p. 60。
 - 22) 速水前掲書、p. 125。
 - 23) 松岡前掲書、p. 155。
 - 24) マウントとは、「相手より絶対的優位に立ち、一方的に攻撃したり相手を支配下に置いたりする」という意味で使われる俗語。
 - 25) 山邊鈴 (2020) 『この割れ切った世界の片隅で』note 〈https://note.com/_carpediem_/n/nba61eb70085a〉 2020年9月29日アクセス。
 - 26) 阿部幸大 (2018) 『「底辺校」出身の田舎者が、東大に入って絶望した理由』『現代ビジネス』〈<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/55353?page=4>〉 2020年9月29日アクセス。
 - 27) 阿部幸大 (2018) 『大反響「底辺校出身の東大生」は、なぜ語られざる格差を告発したのか』現代ビジネス、〈<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/55505?page=5>〉 2020年9月29日。
 - 28) 哲学者ニーチェによる用語であり、弱者が強者に対して溜め込んでいる憎悪や妬みを意味する。
 - 29) 橋木・浦川前掲書、p. 202。
 - 30) 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 (2017) 『地方創生をめぐる現状と

課題』〈https://www.soumu.go.jp/main_content/000573278.pdf〉 2020年12月28日
アクセス。